

NUAL

名古屋大学全学同窓会
NAGOYA UNIVERSITY ALUMNI ASSOCIATION

Newsletter

No.17 平成24(2012)年3月

NUAL (ニューアル) は Nagoya University Alumni Association の略称です。



上段 左：OB・OGと部員との集合写真（2010年8月インカレにて）、右：エイトの力漕（庄内川にて）

下段 左：八高漕艇部の出艇風景（昭和17年頃、庄内川の松蔭にて）、中央：2011年名阪戦表彰式、右：女子ダブルスカル（2011年インカレ7位入賞）

Contents

特集1 第7回ホームカミングデイ報告 2
Report on the 7th Homecoming Day

特集2 名古屋大学漕艇部が創基100周年を迎える... 4
The Nagoya University Rowing Club Marked Its
100th Anniversary

同窓会ニュース 7
NUAL News

活躍する会員たち 10
NUAL People in Action

事務局からのお知らせ 16
From the NUAL Office

名古屋大学漕艇部が創基100周年を迎えました。今号では、漕艇部の歴史をはじめ、現役部員と卒業生との絆、最近の活躍や地域貢献などについてお寄せ頂きました。また、昨年10月に開催された第7回名古屋大学ホームカミングデイの報告と、今年創立10周年を迎える本同窓会記念行事についてお伝えします。

The Nagoya University rowing club has marked its 100th anniversary. In this issue, we will introduce the history of the rowing club, the bonds between current members and alumni/ae, current club activities, and the club's contributions to the local community. Also, we will provide a report of the 7th Homecoming Day and an announcement of the coming event commemorating the 10th anniversary of our association.

第7回ホームカミングデイ報告と次回の案内

Report of the 7th Homecoming Day and Announcement of the Next Event

1. はじめに

平成23年度は、名古屋大学創基140年記念として、第7回ホームカミングデイが、平成23年10月15日（土）に、「地域と大学で考える人・緑・食」をテーマとして行われました。私は、今年もディレクターとして全体をコーディネートしました。名古屋大学のホームカミングデイは、大学主催で卒業生・修了生、地域住民や学生の保護者を対象にしています。今年の参加者は、約4,000名でした。

2. 各種行事

いつものように最も目玉になった行事は、豊田講堂で行われた「名古屋大学の集い」でした。浦口史帆東海テレビ・アナウンサーの司会で、第1部は、濱口総長と太田全学同窓会顧問の挨拶の後、ホームカミングデイのディレクター兼全学同窓会代表幹事として、私から簡単にホームカミングデイの趣旨と実施行事および全学同窓会の近況を報告しました。特に、台湾支部の設立とアカデミック・ガウンの制定について報告しました。

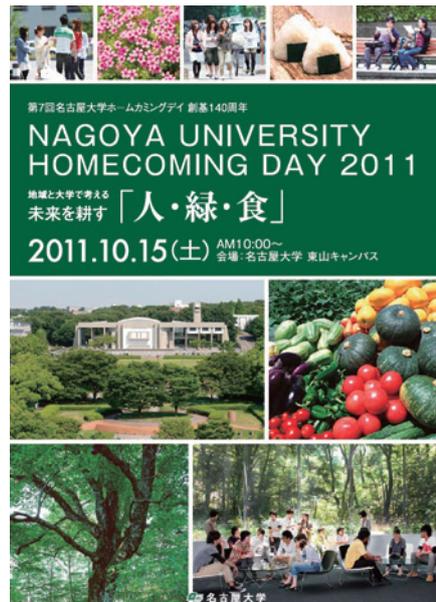
この後で、名古屋大学が昨年創設した、国際交流貢献顕彰授与式を行いました。全学同窓会タイ支部長のアピナンさんとラシドさん（パキスタン）が受賞され、総長から賞状を、太田顧問から豊田講堂をレーザーで内部に立体彫刻したクリスタルの副賞が授与されました。

第2部は、名フィルによるコンサートが行われました。最初に、東日本大震災でなくなられた方々への慰霊の意味を込めた「弦楽のためのアダージョ（バーバー）」が演奏されました。この演奏の前後では拍手が遠慮されました。次に、若手女性の売り出し中の南紫音さんをソリストに迎えて「バイオリン協奏曲（チャコフスキー）」と「交響曲7番（ベートーベン）」が熱演されました。アンコールは、ピチカートポルカでしたが、名フィルの定演よりよい出来だと好評でした。指揮者の山下さん

から、豊田講堂の音響がよいという感想をいただきました。

シンポジオンでは、生命農学研究科による学術講演会「明日を拓く人・緑・食」が行われました。多くの質問も出て好評でした。

それ以外にも昨年と同じように各種の講演会、スーパーコンピュータや超高压電子顕微鏡などの施設公開、グランパスコーチによるサッカー教室なども行われました。また、附属図書館の本のリユース市や農学部による農産物販売は、昨年と同様に多くの参加者を集めていました。「名大キャンパス雑木林の生物多様性を観察しよう」という行事と名大ウォーキングツアーも多くの集客をし、小雨決行でしたが好評でした。今回、6カ所で初めて行った小編成の各種の音楽のミュージック・プロ



ホームカミングデイ・ガイド表紙



名古屋大学全学同窓会代表幹事
伊藤 義人
昭和50年工学部卒、昭和52年修士修了
名古屋大学情報戦略室長



国際交流貢献顕彰の授与

ムナードも参加者に好評だったようです。

なお、ホームカミングデイに合わせて招待した全学同窓会海外支部の代表者の歓迎会を、前日の14日（金）に、ES館のシェ・ジローで行いました。太田顧問、齋藤副会長、岡田副会長にも来ていただき、総長や理事などの方々もご参加いただき、和気あいあいの楽しい歓迎会になりました。

なお、アカデミックガウンが大学によって制定されました。今後、留学生などがこれを着て修了式に出て記念写真がとれるように、全学同窓会から各研究科に寄付できるように準備をしています。購入を希望する人には、入手できるようにこれも準備中です。

3. 全学同窓会創設10周年記念行事

2002年10月に設立された全学同窓会は、今年10周年を迎えます。豊田会長のご意向もあり、盛大に10周年を祝いしたいと思います。まだ、企画は十分に詰められていませんが、平

成24年10月20日（土）に予定されている第8回ホームカミングデイに、10の海外支部の支部長をご招待して、祝賀会などを企画する予定です。

卒業50周年を迎える1962年卒業の同窓生を始め、10年刻みの周年記念同窓生は優先して招待されますので、是非とも名古屋大学においでください。



名古屋大学のつどい（南紫音さんと名フィル）



海外支部歓迎会の記念写真



ミュージックプロムナードの1つ



留学生の希望により制定された名古屋大学アカデミック・ガウン

名古屋大学漕艇部が創基100周年を迎える 歴代部員は1116名

The Nagoya University Rowing Club Marked Its 100th Anniversary

There have been 1,116 consecutive members in the club

中野富夫（漕艇部部长 法学研究科准教授）

名古屋大学漕艇部はその前身のひとつである、旧制第八高等学校（旧制八高）の漕艇部創部（明治44年）から数えて、昨年2011年に100周年を迎えました。

旧制八高からの歴代部員数は1116名にのぼります。11月12日には100周年を祝い、シンポジオンで濱口道成総長にもご出席頂き、卒業生（OB・OG）、他大学やボート協会の関係者、現役部員を含めて約170名の参加のもと記念式典が行われました。

また式典に合わせ、全学同窓会の大学支援事業から助成を頂き「名古屋大学漕艇部創基100周年記念誌 愛艇心」を

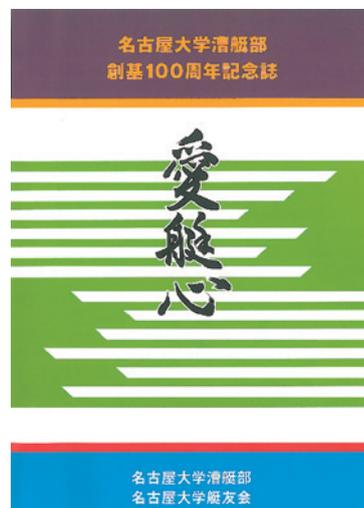
発行しました。

記念誌は漕艇部の100年の歴史を記録するとともに、漕艇部による地域との連携、ボート界への寄与等の社会貢献活動の紹介も行い、名大漕艇部の活動が社会及び大学の要請に応えていることを示す内容となっています。

また、漕艇部では100周年の5年前2006年から100周年記念事業を展開しており、その一環として卒業生からの寄付を募って、庄内川の艇庫に新合宿所（トレーニング室も含む）を建設し、部員の合宿環境の改善や基礎体力の向上に大いに資するものとなりました。



11月12日シンポジオンでの記念式典の集合写真



創基100周年記念誌
題字「愛艇心」は濱口道成総長揮毫

現在の名大漕艇部

一早朝および夕方の練習、合宿所での団体生活

部員数 49名（うち男子 32名 女子17名）

（1年：13名 2年：11名 3年：9名 4年：9名 大学院生：7名）

練習場所は庄内川下流の一色大橋付近の水域。一色大橋のやや上流の中川区大蟻螂町に艇庫、合宿所があり、合

宿を中心とした朝、夕の練習を行っています。

漕艇部は埼玉県戸田ボートコースで開催される全日本大学選手権（インカレ）において、平成8年に初めて男子エイトで順位決定戦に進出したこと（8位）に端を発して、最近では平成19年以降毎年8位以上の入賞を果たしており、国立大学のボート部としては十分な成績を残しています。



漕艇部の艇庫・合宿所の全景
中川区大蟻螂町



庄内川でのレースの様子

名古屋大学漕艇部の生い立ち

名古屋大学漕艇部は、主に70年前（太平洋戦争前）の、名古屋帝国大学漕艇部（医学部、理学部、工学部）、名古屋帝国大学附属医学専門部（注:医学部とは別組織）と100年前に創立した第八高等学校、それに名古屋経済専門学校等の漕艇部の伝統と施設を引き継ぎ、昭和24年の学制改革による新制名古屋大学の発足に伴い、現在の名大漕艇部の形態が出来上がりました。

名古屋帝国大学漕艇部の源となる県立愛知医科大学漕艇部は昭和4年に正式発足しました。初代部長は我が国脳神経外科学の開拓者である斎藤眞教授です。斎藤先生はその後、名古屋帝国大学、名古屋大学と名称は変わりましたが昭和24年まで20年に亘り漕艇部長をつとめられ、部長在任中の20年間に名大漕艇部の発展に多大な貢献をされました。



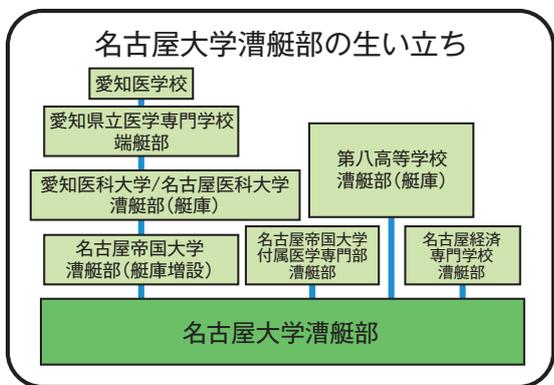
観戦中の斎藤眞教授漕艇部長 昭和24年

八高漕艇部—その精神を受け継いだ新制名大漕艇部

八高漕艇部は100年前の明治44年に創部されました（八高創設は明治41年）。八高漕艇部は、インターハイ（旧制）や対校戦に輝かしい成績を残しましたが、昭和24年の学制改革により、その幕を閉じました。新制名大漕艇部は旧制八高漕艇部の艇庫や設備を引き継ぎましたが、八高漕艇部の根本精神であった「漕士銘記三則」特にその中の「愛艇心」は現在も名大漕艇部にしっかりと受け継がれています。



昭和23年八高艇庫前にて



昭和36年中国日本レガッタ（エイトの部）で優勝
1位 名大 2位 東京トヨペット 3位 慶応大

新制名大漕艇部の活躍—中日本レガッタでの優勝

昭和30年代から40年代前半は新制の名大漕艇部が強豪へと進化した時代でした。当時の日本の4大レガッタのひとつと言われた中日本レガッタにおいて、常に優勝争いに絡み、特に昭和36年の第6回大会のエイト決勝では2位以下を一艇身以上離し初優勝し、昭和43年にもエイトで2回目の優勝を果たし、まさに当地区ボート界の雄としてその地位を確固たるものになりました。



昭和43年中日本レガッタ（エイトの部）で2度目の優勝（手前が名大）

艇友会（OB・OG会）の強い支援

漕艇部では、卒業生で構成する艇友会の組織が強固で、物心両面で現役の活動を支えています。毎年艇友会総会を開催して、OB・OGと現役部員が親しく交流して先輩と現役部員の絆は非常に強固なものがあります。

今回の100周年記念事業では新合宿所を艇友会員の寄付を受けて建設しましたが、平成14年の新艇庫の建設も艇友会員の寄付によって行われています。



新合宿所：100周年記念事業で艇友会員の寄付で建設（2011年3月完成）

生涯スポーツとしてのボートの魅力—OBは世界マスターズレガッタにも参加

名大漕艇部では、卒業後もボートを漕ぎ続けるOBも多く、全国各地で開催されるレースに積極的に出場して上位の成績をあげています。2008年愛知池で開催された第1回全日本マスターズレガッタでは、17クルー52名のOBが参加、第2回は諏訪湖で開催され20クルー51名、第3回は丸山川（城崎）で開催され18クルー50名が参加し、大学OB会のローイング活動として最も活発な団体と全国的に認識されています。更にはFISA世界マスターズレガッタに2009年より毎年参加するようになりました。



第3回全日本マスターズでの写真（エイト70～74歳の部）



世界マスターズの写真 ウィーンのレース会場にて

1995年に女子部創設とその活躍—2004年インカレでは2種目で2位

1995年（平成7年）に女子部を部員1名でスタートしました。そして、その後部員数も増え、2002年（平成14年）の全日本大学選手権（インカレ）でシングルスカル3位入賞、2004年（平成16年）のインカレではダブルスカル、舵手無ペアで2位の素晴らしい成績を残しました。

女子部は昨年平成23年のインカレでもダブルスカル7位入賞の好成績を残しています。

地域ボート界や地域社会への貢献

中部地区の大学ボート界（中部学生ボート連盟）の中心的な存在として活動しています。また実業団の担い手や地域スポーツ活動の担い手を数多く輩出しており、当地区のボート界の発展や基盤維持に大いに寄与して来ました。さらに、名大漕艇部をはじめ、庄内川に艇庫を持つ6団体が連携して、2004年から親子ボート教室を開催し、家族でボート競技を楽しむことが出来る場を提供しています。毎回好評を得ており、今後も地域コミュニティとのふれあいの場として、充実したものになるよう努力しています。また庄内川の定期的なごみ拾い（庄内川アダプト）により、河川環境の美化に努めています。



親子ボート教室の様子

クラブ活動を通じた人材育成と100周年を新たな出発点に

大学のクラブ活動の主たる目的は心身ともに健全で有為な人材を世に送り出すことです。

名大漕艇部はこれまでに、産業界をはじめ社会の様々な分野に多くの人材を送り出して来ました。ボート競技や団体生活を通して培った判断力、協調性、忍耐力がその土台を形成したことと思います。

100周年を契機に漕艇部の歴史の重みを再認識し、ボート競技を通して有為な人材の養成、地域社会への更なる貢献、全国レベルでの活躍に向けて一層の努力をしていきたいと思っております。

全学同窓会の大学支援事業からの助成を頂き、100周年式典、記念誌の発行を無事終えることが出来ました。紙面をお借りして厚くお礼申し上げます。

支部・部局便り News from the Alumni Associations of Different Schools and Regions

部局や地域ごとの同窓会から寄せていただいた便りを掲載します。それぞれが全学同窓会と連携しながら活動しています。

Here you can find announcements and news from alumni associations of schools and/or regions. These associations and NUAL are cooperating with each other to everyone's benefit.

ロンさん祝賀会

ロン全学同窓会ベトナム支部長・司法副大臣就任祝賀会

2012年1月5日(日) 19:00からベトナム・ハノイ市のダイウーホテルにて、名古屋大学全学同窓会ベトナム支部長であるレ・タイン・ロン氏の司法副大臣就任祝賀会が開催されました。同氏は、1999年にJICA 長期研修員として来日し、本学大学院法学研究科博士課程に在籍し、国際法を学びました。2003年に博士号を取得しましたが、法学研究科としては初めて英語による論文で博士号を取得した学生であり、3年間で論文を書き上げ、高い評価を得ました。帰国後は、来日前から勤務していた司法省に戻り、2008年からは司法省国際協力局長として活躍し、2011年10月にはこれまでの実績が認められ、司法副大臣に就任しました。

祝賀会には、名古屋大学から濱口道成総長、佐分晴夫副総長、鮎京正訓法学研究科長、成田克文国際開発研究科長、木村芳文多元数理研究科長、市橋克哉CALEセンター長等が出席し、約50名のベトナム同窓生が集まりました。また、鈴木秀夫在ベトナム日本大使館公使、ベトナム国家大学ハノイ法学部ダオ・チ・ウツク理事等にもご出席いただき、同窓生が名古屋での思い出を歌った歌を披露するなど、賑やかな会となりました。



ロン副大臣から記念品を受け取る濱口総長

関東支部 NUAL Kanto Branch

本年度の活動

ホームカミングデイには、幹事が率先して参加しており、関東支部幹事会や関東地区の学科同窓会でPPT等で報告しております。大学の関東でのイベントとしては、『ポストドクター・インターンシップ推進事業』やJST 新技術説明会等の案内や参加をしました。国際交流として、同窓生のいる西村あさひ法律事務所より、ウズベキスタンの名大日本法センターへの寄附講座を、法学部・CALEなどと打ち合わせつつ実施致しましたが、本年もこれを他の地域にも拡大すべく検討中です。産学官連携支援として、文部科学省の



名大男声東京 OB 合唱団演奏会

「緑の知の拠点事業」に協力しました。

卒業生の交流の場を強くするために、学士会の行事、夕食会・午餐会・若手交流会への参加推進に努力しています。

平成24年1月21日(土)開催の名大男声東京 OB 合唱団主催の東京演奏会は、雪の中約400人がトッパンホールに集まり、大盛況でした。関東地区在住の全学部の同窓生約30名による演奏会で、全学同窓会豊田会長や丹羽関東支部長の祝詞のもとに開催されました。プログラムは、東日本大震災の被災者への祈りをもって歌われ、合唱曲50曲のハーモニーが素晴らしいものでした。2年間にわたり、毎週末全員が集まり練習され、ボランティア精神が発揮され、相互の信頼感とチームワークによる結束が築かれ、今回の会に成果として結実されました。全学同窓会活動としてその成果が着実に挙がっている事を示すイベントでした。

■連絡先 関東支部事務局長 片岡 大造
kataoka@tokyo-office.sat.nagoya-u.ac.jp

関西支部 NUAL Kansai Branch

関西支部では、平成24年1月21日(土)、三井ガーデンホテル大阪淀屋橋において、第7回総会を開催しました。当日は、生憎の雨でしたが、60名を超える出席者がありました。

総会では、寛関西支部長の開会挨拶のあと、伊藤全学同窓会代表幹事から、昨年7月の台湾支部設立や全学同窓会の最近の動き、昨年10月のホームカミングデイの様子について報告がありました。また、ホームカミングデイにおいて、タイ支部長が「名古屋大学国際交流貢献顕彰」の受賞者として表彰されたことについて紹介がありました。

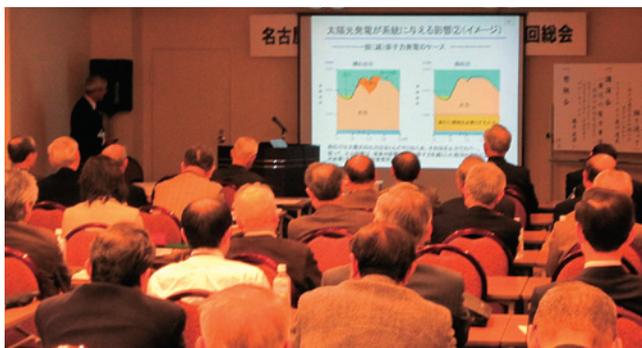
次いで、濱口総長から、「創基140周年を振り返って～我々は勇気ある知識人を育てているか?～」と題した講演

がありました。講演では、「誠実、堅実、実直であるけれども、冒険、放浪を恐れる傾向を強くする名大生」を「世界に通ずる勇気ある知識人」に育てることが使命であり、自由な発想を支える対等な人間関係、若手研究者の自立を促す研究指導、強靱な精神力を育む文化など、先達たちが重んじてきた「自由闊達な学風」を常に意識し、「挑戦する人材」を育てていきたいと述べられました。

続いて、関西二葉会会長（関電プラント（株）社長）の藤井眞澄氏から「最近の電力事情～関西の状況を交えて～」と題し、当面の電力需給見通し、福島原発事故の概要、今後の電力供給などについて、数値データ等を交えてお話いただきました。

3.11以降、原子力発電安全対策への不信感が高まっているところでもあり、参加者は、真剣に聞き入っていました。また、原子力発電の是非を考える上で、大変参考となる情報を得ることができました。

総会終了後の懇親会では、参加者からの近況報告や卒業部局毎の記念撮影が行われるなど、会は和やかなうちに終了しました。



熱心に講演を聴く参加者たち

■連絡先 関西支部長 寛 哲男
E-mail:secretary@sanyo-chemical.com

文学部・文学研究科同窓会

「秋季サロン」を開催

～名古屋市博物館 副館長 神谷浩さんを招いて～

文学部同窓会の秋の恒例行事「秋季サロン」は、10月15日、大学の「ホームカミングデー」に合わせて開催しました。今回は名古屋市博物館の副館長としてご活躍中の神谷浩さんの講演会を行いました。テーマは「事件は現場で起きている」として、名古屋市博物館・美術館双方を学芸員として現場を歩き、副館長としてマネジメントにも関わった長い経験をもとに、その舞台裏話も交えて楽しくお話いただきました。学芸員という仕事は、世界の有名美術館とも交渉し、例えば「ルノアール展」の場合のように世界の3大美術館からの特別作品が一堂に展覧できるような場合、まさ



「秋季サロン」講義風景

に学芸員としての醍醐味を味わうことができると述べられました。一方で「ゴッホ展」の開会式直前での爆破予告事件の顛末については、刻一刻と緊張感の高まる中を責任者としてどのように動いたのかなど貴重な経験について詳しくお話いただきました。

講演会終了後、神谷さんを囲んでの「ティーパーティ」では多くの聴講者の皆さんが参加して、和やかな雰囲気の中で終了できました。本年も魅力的な「秋季サロン」を企画します。学内どなたでも自由にご参加ください。

医学部保健学科

図書室に「キャリア形成支援図書コーナー」設置

このたび、医学部保健学科は「医学部保健学科におけるキャリア形成支援プログラムの構築と推進」という名目で全学同窓会から支援事業費をいただくことができました。近年、医療系にも就職活動に難渋する学生や、たとえ就職できても新しい職場にうまくなじみず早期に離職する事例が増えてきました。このような現状から、保健学科でもキャリア



キャリア形成支援図書コーナーと入庫された関連書籍

形成支援の必要性が叫ばれるようになってきました。すでにキャリア形成支援プログラムをスタートさせ成果を上げている専攻もあります。

さらにこのたび、キャリア形成支援の一環として、全学同窓会の支援事業費を活用して、保健学科図書室に「キャリア形成支援図書コーナー」が設置されました。すでに数十冊のキャリア関連書籍が入庫されております。これからも順次追加されていく予定です。

これまで保健学科にはキャリア形成に関する書籍は皆無で、学生は自費でこれらを購入していました。今後は、学生が支援図書コーナーの書籍を利用し、キャリア形成や就職活動を潤滑に進めていくことが期待されます。

国際言語文化研究科同窓会

国際言語文化研究科同窓会では、第7回名古屋大学ホームカミングデイに際し、総会のほか、以下のような企画を実施し、70名ほどの来場がありました。活発で有益な議論のある楽しい会合だったと思います。来年度も公開講座等の企画を実施する予定です。どうぞご期待ください。

- 1) 平成22年度提出博士論文発表会
- 2) 公開講座

「言語と文化の多様性を求めて」と題し、堀江薫教授、柳沢民雄教授、鶴巻泉子准教授、イザベル・ピロドー（院生）、アリア・チンギシユパイェヴァ（研究生）を講師とした公開講座を開催

■連絡先 同窓会事務局長 田所 光男
tadokoro@cc.nagoya-u.ac.jp

法学部・名法会

法学部・名法会が開催される

2011年10月8日（土）11:00～13:00、CALE フォーラムにて昭和30年卒（第5回）の同窓生を中心とした同期会（名法会）が開催され、17名が参加しました。この会は毎



名法会でのミニ講義の様子

年この時期に行われているものです。塚田健雄氏の司会のもと、まず最初に岩田和雄氏から開会のことばがあり、続いて鮎京正訓研究科長から挨拶と法学部・法学研究科の近況に関しての説明、次いで愛敬浩二教授から「憲法問題を考える視点」のテーマで「表現の自由」についてのミニ講義があり、同窓生は学生時代に戻ったかのように、興味深く耳を傾けていました。

記念撮影の後で、坂田武司氏の音頭にて乾杯の後、会食に移りました。そして会食をしつつ、司会者の指名で同窓生が近況報告を兼ねたスピーチを行い、和気あいあいの雰囲気の中で会は進行しました。

話は尽きませんでした。小野耕一氏の閉会の辞で今回の会を終了しました。名法会の幹事は毎年各ゼミが交代でつとめますが、今年は幾代ゼミが担当しました。



名法会出席者全員での記念撮影

活躍する会員たち NUAL People in Action

「活躍する会員たち」では、同窓会会員の各界におけるご活躍ぶりを紹介しています。第14回は、名古屋市立大学にご在職の傍ら本学大学院医学系研究科で博士を取得し、子育て支援等の分野でご活躍の門間晶子さんと、大学院国際開発研究科を修了し、南アジアでのNGO活動等を経てコミュニティー開発・人材育成専門家としてご活躍の原康子さんにご登場頂きました。

The “NUAL People in Action” column features our alumni/ae playing active roles in various fields. The 14th article in this series covers the activities of Dr. Akiko Kadoma and Ms. Yasuko Hara. Dr. Kadoma received a PhD from the Graduate School of Medicine and is currently working in the field of child support. Ms. Hara, who received a master's degree from the Graduate School of International Development, has been actively involved with NGOs in South Asia. Currently, she is working as an expert of community development and human resource development.

門間 晶子さん



■略歴

- 昭和60年 3月 千葉大学看護学部卒業
聖マリアンナ医科大学病院小児外科病棟看護師、名古屋市保健師、愛知県立看護短期大学助手を経て
- 平成 8年 4月 愛知淑徳大学大学院コミュニケーション研究科修士課程入学（平成10年3月修了）
- 平成 9年11月 名古屋市立大学看護学部開設準備室
- 平成11年 4月 名古屋市立大学看護学部 講師（地域看護学）
- 平成15年 4月 名古屋市立大学看護学部、大学院看護学研究科助教授（平成19年より准教授、現在に至る）
- 平成17年 4月 名古屋大学大学院医学系研究科博士課程（後期課程）入学
- 平成23年 3月 学位取得 博士（看護学）

■社会活動

- 2006年度～非特定営利活動法人子育て支援のNPO まめっこ・理事
- 2008年度～名古屋市里親委託推進委員会委員
- 2009年度～名古屋市防災会議委員
名古屋市子ども青少年局
- 2010年度～子ども・子育て支援センター講座「みんなどうしてる？シングルママの子育て」
- 2011年度 母子自立支援員専門研修の講師
愛知県内の保健所、市町村保健センターにおける新任期保健師研修、事例検討会等の講師・助言者

■所属学会

日本看護研究学会（評議員・査読委員 H22年度～）、日本看護医療学会（評議員・査読委員 H22年度～・編集委員 H23年度～）、日本災害看護学会、日本看護科学学会、日本公衆衛生学会、日本家族看護学会、日本地域看護学会、日本小児看護学会

■名古屋市立大学で保健師について思う

私が勤務する名古屋市立大学は6学部をもち、最も新しい看護学部は平成11年に開学しました。私が担当する地域看護学はコミュニティを対象として看護を展開するものであり、母子保健、精神保健、難病保健、高齢者保健等幅広い領域を包含しています。私自身は最近では母子保健活動に焦点をあてて研究を進めています。県内外に保健師として活躍する卒業生を応援したいという思いから、年に1回、卒業生保健師交流会を開催しています。

行政の保健師の活動は、保健所か市町村保健センターかという勤務場所、都市部か郡部かという地域特性等の諸条件によって多様です。あらゆる年代の、さまざま

な健康状態にある人々の健康的な生活をめざして個人や家族、集団を対象に関わるのですが、国の保健施策の動向等の影響を受け、その役割も変化してきました。訪問看護師のように地域で働く看護職者、介護支援専門員（ケアマネージャー）のようにケアを調整する職種も生まれました。高齢者の支援には地域包括支援センターが大きな役割を果たしています。しかし、孤立した子育て、子ども虐待、発達障がいをもつ人への支援、生活習慣病予防、災害時の健康支援、自殺予防、ホームレス支援など、従来の健康課題から近年特に重要性が高まった健康課題まで、さまざまな領域でコミュニティを単位とした看護活動が必要とされています。



名古屋市立大学看護学部卒業生保健師交流会

■名古屋大学大学院医学系研究科看護学専攻での経験

修士課程入学時は既に教員でしたが、保健師の底力とその影響要因を解き明かしたく、保健師のエンパワメントに関する調査研究を行いました。量的な研究で明らかにできることの面白さと、その限界とを同時に味わいました。

もう少しじっくりと、人の経験を丁寧に理解できるような、何らかの生きにくさを抱えて暮らす人々の息遣いを炙り出すような研究がしたいと考えていたところ、参加していた「ナラティブ研究会」で、出身大学の先輩にもあたる名古屋大学医学部保健学科の浅野みどり教授に出会いました。そして博士後期課程に進学することができ、そこで様々なことを経験しました。まず、米国オレゴン州の出産直後からの育児支援「ヘルシー・スタート（健康な出発）」の研修では、支援の対象となる人や支援者の強みを見つけて伸ばす徹底した姿勢を学びました。一方、乳幼児健康診査など、わが国の母子保健活動の強みも改めて確認できました。国際家族看護学会のために、

タイ、アイスランド、京都へ出かけました。また、浅野教授を研究代表者とする「広汎性発達障害をもつ子どもとその家族への支援」にも取り組みました。現在も勤務大学の学生と共に参加しているのが「障がいをもつ多胎児の会（ツインマザー



第9回国際家族看護学会（アイスランド）にて

ズ・クラブ)」での託児ボランティアです。

私自身の子育て支援の研究や実践活動のフィールドとなったのは商店街の空き店舗を利用した子育て支援施設であり、今でも毎月、定期的にシングルマザーの交流会を開催しています。参加者数に関わらず、まずは「開いていることが大事」と考えて続けています。病気や障がいを抱えている人々やその家族への支援は看護学の研究課題として受け入れられやすいのですが、シングルマザーというマイノリティの人々の「子育て」はどうでしょうか。私は、子育てという営みが、特に現在のようにどんな世代の人も孤立しがちな世の中では、時に親に（特に母親）孤独感や生きづらさを抱えさせかねないと考えています。そんなときに、なんらかの事情によってサポートを得にくくなった人の子育てを丁寧に支援していくことが、だれにとっても生きやすいまちづくりにつながると考えています。

東日本大震災の被災地では、仮設住宅での孤立を防ぎ地域の絆を強めようという取組がなされています。私が参加した民間のボランティア組織では、昼食をつくり、一緒に食べながら、仮設住宅や自宅にいる、孤立しがちな人に声を掛けていました。若者、高齢者、そして子育て中の人たちが、孤立しない、つながりを保てるための活動はやはり看護の要の機能であると考えます。

■スタートラインに立って

博士の学位を取得したということは、研究者としてのスタートラインに立ったに過ぎません。社会人大学院生というのは、とすれば本業の忙しさに圧倒され、大学院生らしく過ごせていないのではないかと感じることもありました。今回、このような寄稿の機会をいただき、指導教員や研究仲間にも恵まれたことに改めて感謝し、確かに名大大学院生であった日々を振り返り、これを強みとして、これからの研究者生活をゆっくりでも進んでいきたいと思えます。



商店街の空き店舗を活用した子育て広場「遊モア」

原 康子さん



■略歴

1971年生まれ、ネパール連邦民主共和国・カトマンズ市在住

1996年 3月 名古屋大学大学院国際開発研究科国際協力専攻修士課程修了

2001年 4月 認定NPO 法人ソムニード(岐阜県高山市)ソムニード・インド現地事務所(アーンドラ・プラデッシュ州ビジャカバトナム市) 駐在

在職中、国際協力銀行(現 JICA: 独立行政法人国際協力機構)の短期委託調査(インド・タミルナド州、ラジャスターン州、カルナカタ州、トリプラ州)、JICA 技術協力プロジェクト(インドネシア) 短期専門家派遣

2011年 7月 ソムニード退職

2011年 8月 コミュニティー開発・人材育成専門家(フリーランス)

2012年1月17日より「インド・オバチャン奮闘記」岐阜新聞隔週火曜日25回連載スタート(文:原康子&漫画:田中由郎)

2011年10月、ホームカミングデイと同日。私は初めて国際開発研究科の同窓会に参加した。そこで、インドに10年間、NGOの職員として駐在していたと話す、「ほー、インドに10年もいたのですか」と、みなさん、そこで感心され、そのあとの私の話は聞かず、自分がいかにインドで苦労したかをつらつら話されるのであった。ちょっと待つて!私がインドで何をしていたか聞いてくれてもいいんじゃない?

それを知ってか知らずが、同窓会で再会した先輩よりの、同窓会誌にお前も何か書けとのご用命である。これでようやく、インドで何をしていたのか語れるではないか。

そもその原体験は、国際開発研究科在学中の1995年、海外実施研修で訪れたフィリピン農村である。そこで、私は、地元の保健婦さんに、調査に協力してもらった。彼女は、愛想良く私の質問票に付き合ってくれたが、彼女の笑顔とは裏腹に、私には、彼女とコミュニケーションが全くできていないのではないかと何かしどかしさがあった。

途上国の人とコミュニケーションができないのは、将来、援助の現場で仕事をしてゆきたいと思っていた私には致命的、なはず。でも、当時の私には、そこまではっきりした自覚は無い。自覚は無いが、怖いもの知らずの度胸はある。で、まずは実践あるのみと、やはり援助の現場に飛び込んでしまった。飛び込んだのが国際協力 NGO の職場だった。

今思えば、20代半ばのこのナイーブさがなければ、本音でやりとりをさせれば、インドのスラムのオバチャンにも負けないアラフォーオバチャンの私はない。

しかし、大学院を卒業して、すぐに途上国の現場で仕事できたわけではなかった。国内勤務や、インド留学を経て、ようやく認定 NPO 法人ソムニード(岐阜県高山市本部)の初代インド駐在員になれた時、私は30歳になっ

ていた。

当時のソムニードは、初の駐在員となる私の給与をインドルピーでしか払えないピンボーな団体だった。資金が潤沢にあり、現地の人から望まれるままに、学校だ、病院だ、灌漑設備だと、物や建物を与え続けるような援助は無理。

では、何を援助するのか。「与えない」援助の技術を、私は、地方都市のスラムで学ぶことになった。

私が暮らしていたアーンドラ・プラデッシュ州は、名古屋といえば味噌煮込み、アーンドラ・プラデッシュ州といえばマイクロクレジットというくらい、マイクロクレジットが盛んな所だった。しかし、スラムに暮らす女性たちは援助の受け手、お客さん。それがマイクロクレジットの実態だった。ソムニードは、そこに、「オバチャンのオバチャンによるオ



ビジャカバトナム市内のあるスラム



指導員研修参加希望者を対象にした説明会。模擬研修の合格者のみが指導員研修に参加する

「パチャンのための信用金庫プロジェクト」で切り込むことになり、私が担当となった。

わずか数十人で始まったこの信金は、今では1,500人近い会員を有し、日々の運営すべてをスラムのオバチャンたちが担っている。

ソムニードの支援は、オバチャンたち自身が信金を経営できるようになるための研修だった。その聞くも涙、語るも涙ではなく、聞くもお笑い、語るもお笑いの様子は、ソムニードのブログにアップしてあるので、是非お読みいただきたい。

もちろん研修から脱落していったオバチャンの数も多い。しかし必要な技術を学ぶことができたオバチャンたちは、他の組合員から何とマダムと呼ばれるようになり、信頼されている。

ソムニードの研修は、「オバチャンたちの思い込み」と「現実」を上手に聞き分け、問題の本質を見極めることがベースになっている。自分が相手だったらどうするか、自問しながら対話を重ねつつ、問題の本質をオバチャン



信金の年次総会で、指導員研修を修了した会員に修了書を手渡す

たち自身に気づいてもらい、その解決に向けて行動できるように導いてゆく。それが、私が10年間インドで学んだ技術だった。(インドでの活動写真提供: 認定 NPO 法人ソムニード)



指導員による研修。年間の支出を絵カードで示し、賢い家計のやりくりの方法を会員自身に気づいてもらう



2011年4月信金の年次総会。全員起立して、東日本大震災の犠牲者の皆さんに黙祷を捧げる女性たち



2011年10月、国際開発研究科の同窓会にて、同窓生と記念撮影(筆者写真中央)

同窓会支援事業 NUAL Support Project

全学同窓会の活動理念に沿った名古屋大学の活動（学生活動、就職支援事業、本部・部局による行事・寄付講義等）を支援するため、公募型の大学支援事業を実施しています。2011年に採択した事業について、担当者より報告いただきました。

NUAL has an open invitation type support project for Nagoya University's activities (including student activities, employment support service, events and lectures) in harmony with the activity principle of the association. The following are summaries of the activities selected in 2011.

「名古屋大学土木系教室五十周年記念行事」の開催

申請代表者：林 良嗣
(環境学研究科 教授)

学内外から片桐正博愛知県副知事、足立敏之国土交通省中部地方整備局長、中村英夫東京都市大学総長、松尾稔名古屋大学元総長など名誉教授および同窓生を含む約65名の参加を得て、記念行事を開催した。

記念講演では、徳山日出男国土交通省東北地方整備局長から「東日本大震災：初動期の活動について」と題して、地震発生直後からの復旧・救援活動の指揮に当たった体験や、組織の意思統一・抗堪性と通信の確保・民間との連携などの教訓と反省が生々しく語られた。

パネルディスカッションでは、林良嗣環境学研究科教授をコーディネーターに、「統合技術文化の形成と国際共有への土木工学の展開」をテーマとして山本卓朗土木学会会長、西村政洋アジア開発銀行専門家ら6名のパネラーによる討議が行われた。途上国ニーズと日本のインフラ技術の世界に共有されうる普遍的な価値、スピリットとチームワークに裏打ちされた統合技術文化のあり方、その移転での留学生教育の役割と日本文化を理解する留学経験者との協力、などが重要であることの見解が交わされた。

記念講演やパネルディスカッションを通して、名古屋大学土木教室の災害や社会資本構築の世界的な役割を伝える機会となった。また、150名以上の学生が参加し、次世代の社会資本構築に寄与する人材育成の一助となったと考えられる。

さらに、キャンパスツアーや記念交流会を通して、同窓生に大学の現状を見学してもらうとともに、同窓生同士の交流を深めることができた。



記念式典の様子

「名古屋大学短期留学受入れプログラム(NUPACE)設立15周年記念シンポジウムおよびNUPACE・交換留学同窓会」の開催

申請代表者：野水 勉
(留学生センター 教授)

10月14～15日、名古屋大学短期交換留学受入れプログラム(NUPACE)の創立15周年を記念したシンポジウムと交換留学生同窓会を本学で開催しました。

宮田理事の挨拶に続き、水畑順作・文部科学省高等教育局学生・留学生課課長補佐から来賓挨拶と文部科学省における留学生政策の話題提供を受け、続いてパネルディスカッションが行われました。パネルディスカッションの第一部では、ドイツから Benjamin Gehring 氏 (フライブルク大学国際交流室)、韓国から Hyunjoo Cho 氏 (高麗大学国際交流室) を迎え、近藤 佐知彦大阪大学短期留学プログラムコーディネータ・教授、そして本学から野水勉名古屋大学短期留学プログラムコーディネータ・教授を加えて、“Student Exchange Policy and Programmes: Fresh Approaches to Contemporary Challenges” と題して、短期留学プログラムや交換留学のこれまでの貢献と今後の展望に活発な討議を行いました。一日目後半では、NUPACE 同窓生3名と名古屋大学から交換留学として海外留学を経験した卒業生3名が討論し、交換留学を経験したことによって、自分の想像していた人生が大きく変貌を遂げたことを各人から多様に語ってもらいました。

2日目は、NUPACE 同窓生で、米国ケンタッキー州 Morehead 州立大学の James R. Masterson 講師から “Sino-Japanese Relations in the 21st Century (21世紀の日中関係)” と題した学術記念講演を開催し、国際的な同窓会ならではの有意義な討論が行われ、引き続きパネルディスカッションの第三部では、様々な出身の NUPACE 同窓生7名から、NUPACE 参加前と参加後の日本へのイメージを中心に様々なディスカッションが行われました。その後、同窓会イベント、パーティが催され、学生達同士あるいは先生方と学生との間の旧交を温めることができました。

全体を通じての参加者数は約100名近くを数え、NUPACE 同窓生は、海外から参加した5名に加え、日本国内および名古屋大学に在籍する30名近くが集まりました。一方、名古屋大学から交換留学生



NUPACE・交換留学生同窓会フォーラム

として協定大学に派遣された卒業生も30名近く集まり、現在在籍するNUPACE学生や名古屋大学生が加わって、盛大な同窓会パーティを催すことができ、様々な交流が行われました。同窓会に参加できなかった海外の同窓生からも、写真やメッセージが送られ、ポスター展示をしてイベントを盛り上げました。

最後に、財政的なご支援をいただいた名古屋大学同窓会及び関係の皆様方に深くお礼を申し上げます。

「坂田昌一デンマーク日記1954年出版事業」の実施

申請代表者：益川敏英
(素粒子宇宙起源研究機構 機構長)

坂田昌一 コペンハーゲン日記
～ボーアとアンデルセンの国で～



坂田昌一先生は、名古屋大学物理学教室の礎を築き、現代物理学の基礎となるさまざまな先駆的業績を遺された偉大な先達です。とくに、先生が1955年に発表された素粒子の複合模型である「坂田模型」はその後のクォーク理論の先駆けとなる研究として著名ですが、その他にも、湯川秀樹氏と協力して構築した中間子論、湯川中間子と宇宙線中に見つかった粒子との矛盾を解決する二中間子論の提唱、朝永振一郎によるくりこみ理論の端緒をつかったC中間子論など、重要なお仕事を多く残しておられます。

先生は、坂田模型発表の前年にあたる1954年、デンマーク・コペンハーゲンの理論物理学研究所に招聘され、この半年間の滞在中に詳細な日記を記されました。この日記には、ニールス・ボーアをはじめ、研究の最前線を競った物理学者たちの素顔が記され、デンマークの人々と街を愛し、日本の家族を思いやる坂田先生の姿が伝わってくるものとなっています。

2011年は坂田先生の生誕100年の記念の年にあたり、本事業では、この貴重な日記を多くの方に知って頂きたいと考え出版事業を計画しました。さいわい、名古屋大学全学同窓会から助成を頂くことができ、さらには114名にもおよぶ個人の方からのご寄付をいただくことで、ナノオプトニクスエナジー出版局から11月1日に初版1500部をぶじ出版することができました。

感謝しております。この機会に、多くのかたがこの日記をご覧になることを願っております。

「International Food Festival ～東北から名大へ。名大から東北へ～」の実施

申請代表者：鬼澤有紀
(国際開発研究科 前期課程1年)

我々、国際開発研究科に所属する学生団体、国際理解教育プログラム(EIUP)は、名古屋大学全学同窓会の支援を受

け、福島原発事故で被害を受けた宮城県丸森町耕野地区の農業従事者や町の振興会の方々を支援するため、2度にわたり支援イベントを開催しました。

丸森町は、福島第一原子力発電所から50キロ圏内に位置しています。丸森町は、放射能による実害と風評被害という二重の被害に苦しみながらも、実質的な支援を受けられていないという状況にあります。そのような中、被害を受けた振興会や農家の人々が自ら立ち上がり、人々が安心して暮らせるまちづくりを目指し、除染活動を続けていらっしゃいます。このような努力が実り、多くの農産物からは放射能不検出という結果が出ております。

我々は被害の実態を詳しく理解するため、2011年12月22日に、丸森町を訪問しました。丸森町の振興会の皆様に案内して頂き、直営店を営む方々にお会いしてお話を伺いました。また、振興会の方々との懇親会では、事故の影響についてお話をさせて頂きました。我々の活動について、丸森町の方々からは好意的にとらえて頂き、振興会の会長さんから、「応援してくれている人がいるというのは、とても励まされるし、前に進む力になる」というお言葉を頂きました。

このようなことから、我々は丸森町から安全な野菜を購入し、丸森町の野菜を使った料理を提供する、というイベントを名古屋大学構内にあるフレンドリー南部で実施しました。参加者からは募金という形で500円を頂きました。イベント当日は、参加者に丸森町の被害の実態と、我々が被害者の方々から直接聞いてきたことについてプレゼンテーションを行いました。第一回目のイベントは33名、第二回目は53名の方々にご参加頂きました。原発事故について留学生の間で不安な声も多くありましたが、我々のイベントに参加し、「自国の家族に心配しないでと言える」「報道に惑わされず、自分で正しい情報を調べてみようと思った」という感想も頂いております。

イベント時に撮影した写真を、丸森町の方々にお見せしたところ、「ボードメッセージにはとても励まされます。あの日以来いろいろあったせいか、最近私もなんだかとても涙脆くて、メッセージを読んだだけで少し目頭が熱くなってしまいました」とメールを頂き、我々も感無量でした。また別の形で、これからも丸森町との関わりを持ちながら、応援していきたいと考えております。

また、2012年1月21日の中日新聞に、本イベントについての記事を掲載して頂きました。



丸森町耕野地区振興会の方々



中日新聞掲載記事(1月21日朝刊)

同窓会行事カレンダー

全学及び部局同窓会行事が下記のとおり開催されます。

詳細は、全学同窓会ホームページ <http://www.nual.nagoya-u.ac.jp/> をご覧下さい。

- 東京キタン会 観桜会
日時：4月7日（土）12:00～
場所：割烹「水の登」
- 名大遠州会 第9回総会、第17回懇親会
日時：6月16日（土）
場所：オークラアクト シティホテル浜松
- 東山会 第5回関東支部総会
日時：5月19日（土）13:00～17:00
場所：学士会館
- 学友会 関東支部
日時：7月14日（土）16:00～（予定）
場所：学士会館

名古屋大学からのお知らせ

名古屋大学東京連絡所（学士会館内）への職員配置を本年3月末で終了いたします。

4月以降も、これまでどおり利用いただくことができます。利用申請等については、下記までお問い合わせください。

- ・名古屋大学総務部総務課総務掛 Tel. 052-789-2013
- ・名古屋大学全学同窓会事務局 Tel. 052-783-1920

E-mail: nual-jimu@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

事務局からのお知らせ From the NUAL Office

●支援会費のお願い Call for contributions

名古屋大学全学同窓会の活動は、皆様からの支援会費、寄附金に支えられています。支援会費は年度ごとのお支払いとなります。皆様のご協力をお願いします。

- 支援会費 Supporting Fee 支援会員 Supporting member : 一口 5,000円
支援法人会員 Supporting institution : 一口 50,000円

- 支払い方法 郵便振替 Post Office Account 口座番号：00860-8-113043
自動引落 利用ご希望の方は、預金口座振替依頼書をお送りしますので、同窓会事務局にご連絡ください。

「名古屋大学カード」でつながる大学支援

年会費永年無料！ 家族会員（1名）も無料です。
加入者は、7,900名を超えています!!



OB 企業等による優待サービス

木工家具、宝石、ビジネス週刊誌などを優待価格でご利用いただけます。詳しくは、下記 Web ページをご覧ください。

<http://www.nual.nagoya-u.ac.jp/>

編集後記

今号では創立100周年を迎えた漕艇部にその伝統についてお寄せ頂きました。本同窓会は今年創立10周年を迎えます。漕艇部に比べ歴史はまだ浅いですが、よい節目となりますよう卒業生の皆様方のご支援どうぞよろしくお願い致します。

(全学同窓会広報委員会)

NUAL Newsletter No.17 平成 24 (2012) 年 3 月発行

Nagoya University Alumni Association

NUAL 名古屋大学全学同窓会

〒464-8601 名古屋市千種区不老町 TEL/FAX 052-783-1920

E-mail nual-jimu@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

ホームページ <http://www.nual.nagoya-u.ac.jp/>

編集：名古屋大学全学同窓会広報委員会